

天主閣

だより



マキキ聖城キリスト教会

「クリスマスおめでとう！」

藤浪 義孝 牧師

先月の感謝祭祝日の三日前、私たちの教会の奉仕者たちが朝早くから天主閣礼拝堂の玄関に来てクリスマスツリーと綺麗なデコレーションで飾ってくださいました。

アドベントの時節が始まりました。クリスマス祝日までの四週間をアドベント（キリスト待降節）と呼びます。アドベントはラテン語に由来し、「現れる」「来る」という意味です。神のみ子が受肉し人となって来た（初臨）ことを振り返り、死にて復活して天に挙げられたイエスキリストが将来再び来臨するとの約束を思い起こして希望を抱くための時節です。イエスキリストの初臨と再臨の間は、喜びと悲しみの体験が混在します。だからこそ、イエスキリストの初臨を思い出し、再臨の約束に希望を新たにしますのです。

この時節に、私たちがひとところに集まり、一緒に讃美歌を歌い、聖書を朗読し、明日のことはわからないけれども、今生きているという感覚を持ちながら、神が人となってくださった不思議に思いを潜めるのも、そのためです。キリスト待降節は、心情的というより、むしろ霊的です。伝統というよりむしろ確かな希望があることを思い起こす時節です。

多くの人にとって今年も去年のように困難な年でした。悲しみや喪失感を感じている人たちの数は少なくありません。大切な人を亡くされた人、仕事や事業を失った人、失業中の人、メンタルヘルスや不安、うつ病と闘っている人、不正、暴力、差別、政治的偏向、記録的なインフレに、州政府や国に対して怒りや悲しみを感じている人もいます。悲しむべきことはたくさんありますが、同時に感謝すべきこともたくさんあります。

私の妹は山が大好きでした。いつも山麓や山頂に到着したときは写真を送ってくれました。山道は険しく、ときには吹雪のために視界不良の時もありました。しかし、山頂に立った妹の笑顔は達成感で満ちていました。妹が残してくれた写真の数々に、人生は登山に例えられると思いましたが、明日のことは私たちに隠されていますが、私たちにわかることは今生きているという現実です。ですから、ある意味で一年の最後を迎えるという達成感を抱きながら新年に臨むことができます。

パンデミックの影響や思いもよらない苦難や病、或いは戦争で死と向き合うのは限られた人だけなのでしょうか。人生の試練はさまざまで、それから免除されている人は誰もいません。そして試練に会う度に、人生がいかに儂いものであることを覚えるのです。だからこそ、毎日が贈り物であり、私たちをなおも愛してくださる神の善意が私たち一人一人の人生の全てに浸透していることを思い返すことができるのです。

私たちに衣食住があり、私たちの周りには敬虔な人たちがいます。そして聖霊が主イエスキリストを信じる私たちの内におられ、

四六時中、応援してくださいます。さらに、いつの日か主イエスキリストが「生きている人」と「死んだ人」を裁くために再び来臨されるという確たる希望によって勇気づけられるのです。

毎年この時節にクリスマスツリーとして飾り付けられる常緑樹は、真冬の生命の証と言われている。しかし、深いレベルで共鳴することは、そのツリーに飾りつけられたライトです。一年で一番暗くて長く感じられる夜に輝く光は、キリストの来臨の約束を思い出させるのです。

紀元前八世紀、イスラエルは非常な暗黒状況にありました。そのような状況の中で、預言者イザヤは、イスラエルだけでなく全世界に平和をもたらす王と王国が到来することを告げました。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。・・・」
(イザヤ九章二節〜十二節)

世界はまだ暗く、寒く、陰気なものです。しかし、今月二十一日の翌日から日が長くなります。たとえ実感がなくても、春がやってくるのです。それと同じように、イエスキリストの誕生は人類史の転換点だったのです。世界はまだ暗いです。悪や不正があります。しかし、神の国が到来するのです。本当の平和と繁栄の時代が必ず到来します。大昔から預言されていた通りに、神が人間となってベツレヘムの洞窟でお生まれになったからです。ですから、私たちはアドベントのキャンドルを灯すとき、イエスキリストの誕生に希望、平和、愛、喜びに触れる事ができますのです。

今月の言葉

「はい」という素直な心

「おかげさまで」という謙虚な心

「ありがとうございます」という感謝の心

「私がいまいます」という奉仕の心

「ごめんなさい」という反省の心

ジョン・カピラ・川平慈英兄弟の家訓

今後の予定

☆クリスマス・イブサービス

十二月二十四日(土) 午後六時より

☆クリスマス・サービス

十二月二十五日(日) 午前十時

☆お餅つき

十二月三十一日(土) 午前十一時

☆元旦サービス

一月一日(日) 午前午前十時

新しい方も大歓迎です。ぜひ一度足をお運びください。



今月の証

「ハナ子さんから見た神様のビジョン」

玉寄 朋子

十月、日本へ久しぶりに帰国をしました。目的は家族、親戚、友人たちに会う事。

しかし、ちょうどその頃アシラムがある聞き「行きたい！」と速攻で申し込みました。アシラムは一九九八年にマキキで信仰を持って間もない頃、タートルベイ・ヒルトンで二泊三日、たつぷりと、み言葉に聴き、その後、この働きを始めた榎本保郎牧師の「一日一章」をテキストに学びをスタートした原点の修養会、日本では四七年も続いている『加太アシラム』は私の憧れだったからです。和歌山県の加太という小さな村の国民休暇村への山道には、コーナーごとにみ言葉の看板が置かれていて「ここは天国への入り口か？」と思ったほどでした。眼下に広がる瀬戸内海を眺めながら、少し緊張しながら会場にはいると、ミセス黒田がいつもの笑顔で迎えてくださりほっとしました。同室の女性はもちろん「はじめまして」の方。自己紹介をしながら、色々な話をしていると、彼女の口から何度も「ハナ子さん」という名前がでてきました。ハナ子さんの家庭集会で信仰を持ったこと、ハナ子さんにとてもよくしてもらったこと、ハナ子さんがいなかったら自分は救われていなかったと。私はだんだんハナ子さんに会いたくなりました。残念ながらすでに天に召されたとのこと。ハナ子さんへの興味が益々沸いてくる中、同部屋の、もうお一人の婦人が「ハナ子さんの証本があるのでお送りしますよ」とおっしゃってください。その婦人がハナ子さんと最後まで一緒に福音を伝えていた唄野絢子姉であるという事を知りました。東京に戻って数日もしないうちに本が届きました。タイトルは「オリーブ

の樹のかげにて」。ハナ子さんは、大正十三年に京都で生まれ、先天性股関節脱臼というハンディを持ち体の不自由のために苦勞をさされましたが、元アメリカ兵で日本の捕虜となり終戦後牧師となった、ジェイコブ・ディンエーザー宣教師の集会で信仰を持ち、その後福音交友会のエステル・パーワ宣教師、ジュリア・本山宣教師らに養われ生涯主のために働かれた方であるということ、マキキ教会もサポートしていたタイの森本憲夫宣教師がタイへ行くきっかけを作られた方であること、河島民江宣教師と良き友であったことなどなど、宣教の働きの繋がりが、脈々と現在に至っても続けられていることを知り驚きと感動を覚えました。ハナ子さんは神様からの召しを忠実に守り、家庭集会「オリーブ・コインニア」で多くの方が、その献身する姿を見て人々が救われてきたのだと主を賛美しました。戦争はもちろん反対ですし、そのために亡くなられた方を思うと心が痛みますが、あの第二次世界大戦がなかったら、ディンエーザー宣教師をはじめ、多くの宣教師は日本に來なかつたし、宣教師に英語を習ったことがきっかけでクリスチャンになった黒田朔青年が黒田牧師になってハワイに來ることもなかったかもしれないし、そうすると私は救われていなかったかもしれない。そう思うと、思わず「イエスは主なり、イエスは主なり、イエスは主なり！」と3本の指をあげて唱えたくなるのです。今回の加太アシラムのテーマは「それは、あなた方の信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためです。(第一コリント二章五節)」。自分自身の信仰の出发点を思い出し、歩みを振り返り、信仰の完成図を見る。これまで私の信仰を励まして下さった方々を思い起こしその後ろには大いなる主が働いて下さったことに感謝し、ケアホームに入って天に召されるま

でキリストの証人であったハナ子さんを見習って生きていきたいと思つたのでした。「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」(ローマ八章二十八節)

クリスマス由来

クリスマスとは、イエス・キリストの降誕祭です。新約聖書では、キリストの生まれた日を特定はしていません。そのため、降誕祭とは「キリストの誕生日」ではなく、「キリストが生まれてきたことをお祝いする日」となります。

キリストは今から約二〇〇〇年前、ユダヤのベツレヘムの馬小屋で、聖母マリアのもとに生を受けました。この生誕をお祝いする日がクリスマス(降誕祭)です。しかしながら、クリスマスがいつ始まったのか、という経緯で始まったのか多くの教会で明示はしていません。キリストの誕生日同様に、聖書に記述がないことが大きな理由です。

では、なぜ世界中で、そして多くのキリスト教の諸教派で十二月二五日が共通してクリスマスなのでしょうか。いつ頃この慣習が始まったのでしょうか。代表的な由来をご紹介します。

クリスマスがいつ頃始まったか正確な年代はわかっていません。しかしながら、二世紀、四世紀頃に始まったという説が有力視されているようです。

当時のヨーロッパはローマ帝国時代。キリスト教は国教ではありませんでしたが、まだまだ民衆には定着していませんでした。ちょうどその頃、ペルシャから太陽信仰の性格を持つミトラス教という宗教が伝わってきました。そして、このミトラス教には「光の祭り」という

信仰上の大切な行事がありました。「光の祭り」が行われるのは、一年で最も昼間が短くなる冬至。この日を境に再び昼間が長くなっていく、すなわち太陽の力が強まっていくことを祝います。この冬至が、十二月二十五日にあたっていました。

一方で、ローマ帝国も同様の土着の祭りとして、農耕の儀式もまた十二月二十五日前後に執り行われていました。そこでローマ皇帝はイエス・キリストを「光」に例え、「光(太陽)の復活はキリストの復活」とし、前述の土着の祭りをすべて吸収する形で十二月二十五日をキリストの降誕祭に制定します。ほかの宗教との対立を防ぐための、折衷案としての意味合いもあったのでしよう。

このクリスマスの誕生は功を奏し、異なる宗教同士の摩擦を減らすだけでなく、キリスト教を広める大きなきっかけにもなりました。ちなみに、クリスマスに行われるイベントはキリスト教由来のものばかりではありません。たとえばクリスマスツリーは、古代ゲルマン民族のお祭りから伝わったとされています。こういったことから、クリスマスは土着信仰との融合に端を発している可能性が高いのです。

編集後記

今年も天主閣便りが守られ、毎月発行できたことを感謝します。来年はウェブ版でも紹介されます。ご期待ください。

マキキ聖城キリスト教会 宣教師 玉寄 朋子 編集

